

歴史は未来の羅針盤

温故知新

これまで刊行しました、『近江日野の歴史』第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第八巻「史料編」は、教育委員会や各公民館などにおいて、一冊四、〇〇〇円で好評販売中です。ぜひともお買い求めください。

ホイノボリの祭り

春爛漫のさなか、日野町内の日枝神社（大窪）、日枝神社（小井口）、井林神社（松尾）、比都佐神社（十禅師）、長寸神社（中之郷）、大屋神社（杉）、八千鉾神社（三十坪）の七つの神社では、ホイノボリと呼ばれる優雅なノボリが奉納される春祭りが行われます。

ホイノボリは、細長く割った竹ひごに紙で作った花をつけたものを傘状に仕立てたノボリで、その姿はさながら枝垂れ桜のようです。ノボリの先端には御幣が立てられており、神の依代として奉納されます。ホイノボリの製作は、①紙を用いてつくる「花作り」、②花を竹ひごに付ける「花付け」、③ノボリに竹ひごを取り付ける「組立」の3つの工程に分かれており、各集落の住民がそれぞれホイノボリの準備にあたります。

町内7つの神社で行われるホイノボリの祭りは、農耕信仰にもと

づく日野地方特有の伝統的な祭礼行事であるとの理由から、平成12年に滋賀県の無形民俗文化財に選挙されました。

今回は、町内のホイノボリの祭りの中から、八千鉾神社の春祭りについてご紹介します。

八千鉾神社の春祭り

大字三十坪に鎮座する八千鉾神社は、大字増田、大字三十坪上下を氏子とする神社です。古くは鉢森大明神と称していましたが、明治維新後、八千鉾神社と改称されました。

勧請年代は明らかではありませんが、社伝によれば蒲生氏が崇敬し、社殿造営のための資金を寄進したといい、現存する神馬・太鼓なども、その寄進によるものと伝えられています。

また、江戸時代には三十坪村の領主であった旗本渡辺氏の崇敬をあつめ、境内には、元禄15年に旗

本渡辺永倫が建てた碑文や、安政6年に渡辺氏の家臣が寄進した石鳥居などが残されています。

八千鉾神社の春祭りは、毎年5月1日に行われ、増田、三十坪上下から1本ずつ、計3本のホイノボリが奉納されます。

祭礼の前日、4月30日の宵宮には増田と三十坪下から松明が奉納されます。増田では、午後8時半頃に青年団の太鼓を先頭に行列が出発し、「ターイマツ ヨミヤ ヨーガアケタラマツリ」と唱えながら、カエルの声が響く畦道を通じて神社へと向かいます。道中、出雲川沿いの川原には薪とワラで作られたカガリが用意されており、ここで松明に点火されます。同じ頃、三十坪下からも松明行列が出発し、集落はすれに用意されたカンガリ（カガリ）で松明に点火し、神社へと向かいます。三十坪上は、太鼓のみの参加で、三十坪下の行列を先導します。高さ数メートルに及ぶカガリの火柱が夜空を焦がす

さまは勇壮です。

祭礼当日は、早朝からホイノボリが奉納され、各集落の担当者が境内の決められた場所にノボリを立てる作業を行います。ちなみに、ホイノボリの奉納には、大地とノボリとの「交接」という意味が象徴されており、豊稜を祈願する行為であるとの研究が報告されています。

さて、ホイノボリの奉納が終わると、神社では第二拜殿を中心に神事が行われます。神事は、祝詞・巫女神楽・湯立のほか、女子小学生による舞子の舞が行われ、祭礼に彩りを添えます。午後3時頃、出雲川を挟んだ対岸にある御旅所まで御渡りが行われ、還御後、祭礼は終了となります。

この伝統は、地域の人々に受け継がれ、今も続けられています。



▲八千鉾神社の春祭り